

「クライマックス①～バスハイク編～」



3月13日(木) SW
「九州国立博物館&太宰府バスハイク」の様子



九州国立博物館
文化交流展示室見学



在校生代表の送辞。「先輩方は私たちに、行事を通して楽しむだけではなく、共に努力し、支え合うことの大切さを教えてくださいました。どんな状況にも前向きに取り組み、常に周りに心配りを欠かさない姿勢は、

私たちにとって大きな学びとなり、これからもずっと心に残り続けるでしょう。先輩方がいなくなることを考えると、とても寂しい気持ちになります。しかし、先輩方が築いてくださった伝統を受け継ぎ、私たちも成長していかなければなりません。来年度からは、私たちが先頭に立ち、学校を引っばっていく番です。先輩方の背中を目標に、精いっぱい努力してまいります。」と決意を述べた在校生代表の言葉



一つ一つに、卒業生の皆さんと在校生の皆さんの関わりが、どんなに深かったのかを知りました。この上級生と下級生との連帯感の強さが、どこの学校にも負けない、本校の素晴らしさです。



卒業生代表生徒会長の答辞。まず仲間や在校生の皆さんと一緒に取り組んできた三年間の思い出を語ってくれました。そして時間が止まったかのように、クライマックスを迎えました。彼女は、書面からゆっくりと顔を上げ、そして決意し、次のように締めくくりました。

山裾が突然、清澄な空気に包まれます。山の木々はまだゆっくり眠っているのに、そこだけが輝きを放ち、淡い桃色に浮かび上がります。森の妖精とも言われる「山桜」。控えめで、素朴な中にも気品ある「山桜」は、私たちの目をとらえて放しません。また、日本人がこよなく愛してきた「ソメイヨシノ」は、山の木々にそっと語りかけてきます。「もう春だよ。山の木々よ、目を覚ましなさい。」その声が、ずいぶん温かくなった春風に乗れり、山の隅々にまで広がっていきます。

桜は、日本の四季の始まりを予感させます。しかし、この時期、桜の持つ神秘的な風景に、四季全体のクライマックスを迎えたような錯覚を覚えます。

卒業式から2週間が過ぎました。卒業生の皆さんは、それぞれ自分の道を、しっかりと歩み始めました。しかし校舎には、卒業式の余韻がまだ残っています。卒業式は、卒業生の皆さんはもちろんのこと、三年間手塩にかけてきた先生方、18年間育ててこられた保護者の皆様にとって、ひとつの節目であり、「クライマックス」でした。

梅満開の太宰府天満宮



お参り



「私たちが学習面だけではなく精神面でも大きく成長することができたのは先生方のおかげです。常に支えてくださった担任の先生。本当にありがとうございました。友人とのたわいのない話や教室から聞こえる笑い声。そういった日常が今でも忘れることができない大切な思い出です。今まで楽しく学校生活を送ることができたのも友だちのおかげです。本当にありがとうございます。そして今日、卒業の日を迎えることができるのも家族の支えがあったからです。十八年間、温かな目で見守っていただきありがとうございました。今日で、私たちはこの仰星学園高等学校を卒業し、それぞれが自分の夢に向かって、その第一歩を踏み出します。」そう語ってくれました。【次号に続く】

